

22. 信仰の試練

ペテロの手紙#22

<https://ichthys.com/Pet22.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

第一ペテロ 1 章 6-7 節の訳:

この最終的な救いを待ち望みつつ、あなたがたの喜びはあふれています。今はしばらくの間、さまざまな試練によって苦しむことがあなたがたの定めであるかもしれませんが、それはあなたがたの信仰が本物であることを証明するためです。この信仰の証明は金よりもはるかに尊いものです。というのも、金もまた火によって精錬されますが、ついには朽ちてしまうからです。しかし、あなたがたの信仰は、この人生というつぼの中で本物と証明されるとき、イエス・キリストが栄光のうちに再臨されるその日に、あなたがたに賛美と栄光と誉れをもたらすことになるのです。

序文: 前回の学びでは、悪魔の支配する世界における圧力や誘惑の中で、信仰を保ち続ける必要性を取り上げました。これは容易な務めではありません。というのも、サタンの世界体制の中心的な目的は、人類を不信仰の状態にとどめること(または、信者を不信仰に引き戻すこと)だからです。そのため前回の学びでは、キリストへの信仰を失うことに伴う危険を強調しました。なぜなら、5 節で述べられていたように、私たちの「究極の救い」、すなわち永遠のいのちによる死からの解放は、完全に私たちの信仰の持続にかかっているからです。今回の 6 節と 7 節でペテロは、信仰についての議論の焦点を少し移し、私たちがイエス・キリストへの信仰を持ち続けるために前向きな励ましと動機づけを与えています。世界が私たちの信仰に加える圧力は、実は必要なものなのです。というのも、試されることなくしては、信仰が精錬され、強められ、本物であることを証明することはできないからです。ペテロはここで、神のご計画の中に、信仰が天の法廷の前で真実であることを立証されることが含まれていると教えています。そして、信者が悪魔の世界における圧力・試練・誘惑にもかかわらず忠実であり続けたとき、神はその信仰を正当に報いてくださるのです。

燃え盛る炉: ネブカデネザル王が、金の像を拝まなかったダニエルの三人の友(シャデラク、メシャク、アベド・ネゴ)を「燃える火の炉」に投げ込むよう命じたとき、そこに集まっていた群衆の誰ひとりとして、この三人の信仰者が生き延びるとは思いませんでした([ダニエル 3 章 1-30 節](#))。しかし神は、彼らを奇跡的に救い出されました。彼らは激

しい炎の中でも焼かれることなく、「火のおいさえ彼らにはつかなかった」と聖書は記しています。私たちの信仰が悪魔の支配するこの世という「るつぼ」の中で試されることは、ダニエルの三人の友が体験した「燃える炉の試練」とよく似ています。神は、時に私たちがこの世の目から見れば信仰が「焼き尽くされてしまう」ような厳しい試練を通ることをお許しになります。しかし、そのような激しい試練を信仰をもって耐え抜くとき、それはこの世に対する証しとなります。それは、私たちの信仰が本物であることの証しであり、また、神が御子イエス・キリストを信じる者を奇跡的に救い出される力を持っておられることの証しなのです。

信仰のるつぼ： ペテロが言うところの「火のような試練」([第一ペテロ 4 章 12 節](#))は、私たちの信仰を精錬する働きも持っています。金が火の中で試され、不純物が取り除かれるように、また鋼鉄が高炉の中で強くなるように、私たちの信仰も圧力の中で忍耐することによってしか純化されず、危機の時に神により頼むことを学ぶことによってしか強められません。神は、私たち自身の益のためにも、また悪魔の支配するこの世における兄弟姉妹たちの益のためにも、試練をお許しになります。私たちが信仰によって道に置かれた困難に打ち勝つとき、その経験は神への信頼をさらに深めます。なぜなら、神が私たちを救い出す力を、理論上のこととしてではなく、実際の経験として学ぶからです。この世にいる間に、神が私たちにご自身の救いの力を証明される唯一の方法が試練であり、また私たちが神と御子イエス・キリストを本当に信じ、たとえ状況が絶望的に見えても神を信頼していることを証明できる唯一の方法も試練です。このようにして信仰を実際に働かせるとき、私たちは神の善と力の証人となるだけでなく、信仰の力と価値の証人にもなります。信仰をもって試練を克服するとき、しばしば自分自身の信仰以上に、他の信徒たちの信仰を強めることとなります。その過程で、私たちは苦しみの中にある他の人々を励ますために役立つ洞察を得ることもあるのです([第二コリント 1 章 3-4 節](#))。

信仰の剪定： 試練は、おそらく「訓練」として理解するのが最も適切です。すなわち、「義に導く訓練」([第二テモテ 3 章 16 節](#))の実践的な応用です。すでに見たように([ヨハネ 15 章 2 節](#)参照)、神は私たちの信仰という「植物」を注意深く刈り込み(試練を通して)、私たちがより多くの実を結ぶようにされます。刈り込みの過程は、しばしばその時点では痛みを伴いますが、最終的には良い結果を生み出すことを意図しています。試練は祝福を生みます。なぜなら、試練を通してのみ私たちの信仰は強められ、それによって霊的成長が早められ、その成長に伴う祝福がもたらされるからです。

ヨハネによる福音書 15 章におけるギリシャ語の語彙は、試練を通じて私たちの「信仰という植物」がどのように刈り込まれるのかという過程に光を投げかけています。2 節で「刈り込む(手入れ/剪定)」と一般に訳されている語は、実際にはギリシャ語の「カタ

イロー(κ α θ α ἰ ρ ω /kathairō)」であり、これは本来「清める」という意味を持つ語であり、英語の“catharsis(カタルシス)”の語源でもあります。翻訳者たちはここで「神が枝を清める」と訳すことを避けたようですが、3節においてキリストが「あなたがたはすでに清い」(ギリシャ語の形容詞「カタイロス(κ α θ α ρ ός /katharos)」、カタイローから派生)と言われていることから分かるように、ヨハネの語彙の選択は偶然ではありません。

ヨハネ 15 章のたとえの意味は次のとおりです。信者である私たちはすでに罪から清められています。なぜなら、キリストが私たちの罪のために死なれ、神がキリストとその御業を信じる私たちの信仰に基づいて私たちを赦されたからです。しかし、私たちは「立場上(ポジション上)」完全に清い者であっても、救われた瞬間から「経験上(実際上)」完全な者となるわけではありません。言い換えれば、私たちの立場上の聖めは、すぐに完全な経験上の聖めをもたらすものではありません(第 13 課参照)。キリスト者となった後も、私たちはなお、キリスト者として**どのように生きるか**を学ばなければなりません。したがって、信仰の試練、すなわち私たちの生き方の清め、または「刈り込み」は、霊的成熟へ進むための不可欠な要素なのです。試練を通して、私たちはますます神を信頼し、自分自身の力に頼ることを減らしていく中で、多くの欠点や不完全さが取り除かれていきます。

救われた瞬間から、私たちのこの世での生涯は、神が絶えず私たちを「刈り込み」また「清め」続けてくださる歩みです。実際、この過程がこの地上の生涯で終わることはありません。史上最も偉大な信者の一人である使徒パウロでさえ、他の誰も耐えられないほどの試練を繰り返し受けましたが、最終的に彼は神がご自身を完全にしてくださるその過程を喜ぶことを学びました。パウロは、試練という極限の中でこそ、他のどんな時よりも神の力に集中し、それに頼ることを強いられたと結論づけました。世が決して理解しえない仕方で、彼の弱さこそが彼を強くしたのです。それはまさに、彼が自分自身ではなく神に頼るようになったからでした([第二コリント 12 章 9-10 節](#))。

したがって、キリスト者の生涯とは、私たちの信仰を試し、強め、精錬し、真実であることを証明する、数えきれないほどの試練を通り抜ける歩みでもあります。この点において、罪と信仰は正反対のものです。信仰は、世の中が何を言おうとも神を信頼し、神の方法に従って行動しますが、罪は神を疑い、実質的には「この問題は自分で何とかしたほうがよい」と言うようなものです。したがって、信仰の試練の本質的なしくみとは、神が私たちの欠点に働きかけ、私たちが信仰の弱さを自覚し、それを克服するために、御子とともにその危機を乗り越えるよう信頼する状況に置かれることなのです。私たちがどれほどそれを進んで行かうか(すなわち、御言葉から霊的な養いを受け、平穏な時に学んだことを圧力の中で進んで実践するか)によって、神が望まれる方向へ成長し

続けることができるかどうかが決まります。

試練には限界がある： 私たちの中で、パウロやヨブのように極限の試練を受ける運命にある者は多くありません。しかし、信仰の模範であるこの二人に襲いかかった非常に厳しい試練にもかかわらず、パウロは自信をもってこう言うことができました。「しかし、これらすべてから、主は私を救い出してくださった」([第二テモテ 3 章 10-11 節](#))。そしてヨブは、すべての財産が完全に回復するのを見るに至りました([ヨブ記 42 章 7-17 節](#))。私たちは、神の約束を信じ、神が私たちを救い出してくださることを、この世においても、また永遠においても信頼している者として、この世での試練は永遠ではなく、永遠の栄光へ至る旅路の途中にある一時的な障害にすぎないことを心に留めるべきです。試練は終わります。しかし、神との命の交わりは終わりません。ですから、私たちがこの世にあって「人々にも天使たちにも見せ物」とされている間([第一コリント 4 章 9 節](#)参照)、私たちが耐えている苦しみを正しく理解し、適切な視点を保つために、いくつかの原則を考慮する必要があります：

1. 試練は耐えられるもの： 試練には限界があり、そのことを私たちは常に心に留めておく必要があります。使徒パウロはこの点を次のように私たちに思い起こさせています。

あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。(第一コリント 10 章 13 節)

パウロは、私たちが直面するすべての試練に対して、神がどのような解決を与えられるのかを完全に見通す力(全知)を持っていたわけではありません。ある場合には、紅海が分かれた時のように、神は明確で奇跡的な形で救いをもたらされます。また別のときには、その解放はもっと控えめで、目立たない形で現れることもあります。さらに、神は私たちが試練「から」救われるのではなく、試練「を通して」救われることを意図されることもあります。つまり、ある嵐のただ中から奇跡的に引き上げられるのではなく、終わりまで信仰と忍耐によって耐え抜くことによってこそ、信仰の真実さを示すのです。上の聖句が明確に教えているのは、神がこの人生で私たちが直面するすべての試練において、必ず助けてくださるということです。私たちの務めは、神が私たちを霊的成熟の高みに導くために最もふさわしく設計された「剪定(せんてい)の経験」として、これらの試練を信仰と忍耐をもって受け入れることです。もし私たちがこのような心構えでキリスト者としての試練に立ち向かうならば、私たちは信仰の成長と、それに伴う神からの祝福を最大限に受け取ることができるのです。それは自分自身の益のためであり、また周囲の人々の益のためでもあります。

2. 試練は永遠には続かない：試練の限界に関する第二の原則として、私たちが心に留めておくべきことは、「ある試練がいつまでも続くように思えるとしても、私たちは神の視点からの忍耐を持たなければならない」ということです。世のあざける者たちは、宇宙が昔から変わらずに存在しているように見えると主張しますが、使徒ペテロはすぐにそれを退け、「主にとって一日は千年のようであり、千年は一日のようである」と述べています。そして、神は不信仰な者たちの非難にもかかわらず、約束の成就を「遅らせて」おられるのではないと指摘しています。神は、ふさわしい時に、定められた時に、ご自身の良き御心のうちに私たちを救い出してくださいます。それは、信仰のない人々が最も予期していない時に「夜中の盗人のように」訪れる主の日の裁きと同じです([第二ペテロ 3 章 8-10 節](#))。聖書の歴史の中で、多くの信者たちは神からの答えを待たなければならないという試練に直面してきました([ヨブ 35 章 14 節](#); [ダニエル 10 章 1-13 節](#))。エリヤもその一人でした。彼はアハブとイゼベルの迫害から神の救いを待ち望みながら、三年以上の歳月を過ごしました。最初はカラスが運ぶ食物とケリテ川のわずかな水に頼って生き延び、その後ザレパテのやもめのもとで神のさらなる奇跡的な供給を受けました([列王記上 17 章](#))。しかし、どんなに長い試練であっても、神はその間ずっとエリヤを守り、養い続け、ついには彼の手を通してバアルの祭司たちに対する大いなる勝利を成し遂げられたのです([列王記上 18 章](#))。ヘブル語で「神を待ち望む」という言葉([חָיַל/yachal](#)「ヤーハル」、多くの場合「希望する」と訳されます)は、ある人々によって「ねじれ、もどえる」という意味の語根から派生したと考えられています。極度の圧迫の中で神を待ち望むことは、まさに身をよじるような苦痛を伴うことがあります。しかし、このような種類の試練こそが、私たちの信仰を築き上げ、霊的成長を加速させるために必要なものなのです。

3. 霊的意気阻喪は危険：身体の一時的な意識喪失が「失神」であるように、霊的な意気阻喪とは、徳の視点——すなわち、神への信仰、永遠の報いに対する確信ある希望、そして神とその子らへの献身的な愛——を一時的に見失うことを意味します。霊的な意気阻喪は、試練の圧力に対する一時的な反応でありながらも、危険な現象です(もっとも、前例がないわけではありません)。エリヤの逃亡、ペトロのキリスト否認、ヨブの忍耐の喪失がすぐに思い浮かびます。これら三人はいずれも並外れた信仰者であり、いずれもすぐに回復しました。それでもなお、各人がそれぞれの過酷な状況のもとで、一時的に信仰の危機——すなわち霊的な意気阻喪——を経験したことは注目すべきことです。もしこのような偉大な信仰者でさえそのような状態に陥ったのなら、私たちもまた、その危険にさらされていることを認めなければなりません。特に、苦しみと試練がキリスト者の生涯の通常の一部であることを考えるなら、なおさらです。使徒ヨハネが示唆しているように、私たちは皆、信仰者として「患難(トリブレーション)」にあずかり、「王国」を待ち望み、「イエス・キリストにある忍耐」を示さなければならない者たち

です([黙示録 1 章 9 節](#))。自分の信仰が重圧にさらされ、それが不当であるとか、耐えがたいと感じるときには、私たちは思い出さなければなりません。私たちはこの重荷を最初に負う者ではなく、最後の者でもないのです([第一ペテロ 5 章 8-9 節](#))。将来、大患難を通過しなければならない信者たちは、私たちの誰よりもはるかに大きな圧力と試練に直面することになるでしょう([黙示録 8 章](#)参照)。

4. キリストが示された模範: 私たちが、自分だけが不当に激しい苦しみを受けていると考えることのないように、常に私たちの主の模範を思い起こすべきです。「あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである」([ヘブル 12 章 3 節](#))。私たちの主の生涯は、人間がこれまでに生きた中で最も困難なものでした。しかもそれは、私たちを救うために、主ご自身が自らへりくだってその道を選ばれたという事実によって、さらに驚くべきものとなっています([ピリピ 2 章 6-8 節](#))。主は、愛する人々に対して完全な奉仕の生涯を送られましたが、その報いとして受けたのは、反対、不信、侮辱、裏切り、迫害であり、最後には一般の犯罪者のように恐ろしい方法で処刑されました。それでも主は、もし私たちがこの世で真に弟子となることを望むなら、「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と命じられています([マタイ 16 章 24 節](#))。キリスト者である私たちにとって、人生とは自分を楽ませるための時間ではなく、神から与えられた使命です。そしてその使命を成し遂げることは、必然的に困難や悲しみ、苦しみを伴います。私たちは確かな権威によって知らされています——主イエス・キリストの模範に従って生きようと望むすべての者は、その結果として必ず苦しみの分を受けることになるのです([第二テモテ 3 章 12 節](#))。しかし、悪魔の敵対に耐えて忍耐し、「キリストの苦しみにあずかる」ことなくしては、この世で神が私たちに与えられた使命を果たすことはできません([第二コリント 1 章 3-7 節](#); [ピリピ 3 章 7-11 節](#); [第一ペテロ 4 章 13 節](#))。

5. 神こそが私たちを支えてくださる方: あらゆる試練と苦難の中にあっても、神は私たちと共におられます([詩篇 3 篇 3 節](#))。神は、私たちを御自分の子とするために御子を死に渡され、さらに私たちのうちに住まわれ、慰めてくださる聖霊を与えてくださいました。私たちの父である神は、私たちに何が必要であるかを知っておられます。野の花を装い、空の鳥を養われる方は、私たちのことも同じように世話してくださいます([マタイ 6 章 25-34 節](#))。神は、私たちの物質的な必要だけでなく、他のあらゆる必要についてもすでにご存じです。神はそれらすべてに対して、時間が始まる前から備えをしておられたのです。また、神は私たちが必要なときに祈ることを待っておられ、求めに応じて答えてくださいます。私たちの父は、私たちに必要な良いものを何ひとつ惜しむことなく与えてくださいます([マタイ 7 章 7-12 節](#))。聖書には、このことを実際に体験した信者たちの証言が数多く記されています。ダビデは、自らの生涯で見聞きしたすべてを

通して、「正しい人やその子孫が神に見捨てられるのを見たことがない」と証ししています(詩篇 37 篇 25 節)。ですから、私たちが忠実に主に従い続ける限り、使徒パウロの次の言葉を確信をもって言うことができます。「神は、キリスト・イエスにある御自分の栄光の富に従って、あなたがたのあらゆる必要を満たしてください」(ピリピ 4 章 19 節)。

6. より大きな視野: 私たちはすでに見てきたように、試練は個人的で個々の問題であり、私たちの信仰を強め、真実であることを証明するために設計された試みです。しかし、信仰の試練の過程はそれだけではありません。試練(そしてそれを私たちがうまく乗り越えること)は、証しの務めでもあります。それは、神によってその信仰が尊ばれ、支えられることを通して、信仰の価値と力を目にする人々へのしるしであり、励ましとなります。試練のとき、私たちはしばしば、誰も自分の痛みや苦しみを見ていない、または理解していないように感じるかもしれません。しかし、私たちは覚えていなければなりません。私たちの困難の中での立派なふるまいによって、誰の心が動かされているのかを知っておられるのは神だけだということを。ですから、すべてが崩れ落ちるように見えるときにも、この特別な証しの務めを心に留めておくべきです。そして、私たちの第一の希望は、キリストへの信仰を通しての復活と、私たちが待ち受ける栄光に満ちた未来にあるということ、決して見失ってはなりません。その未来はあまりにもすばらしく、今の混乱と比べると値しないほどなのです。(ローマ 8 章 18 節)。

7. 天使たちは私たちを見守っている: 計り知れないほど長い時のあいだ、宇宙は人間のいないまま存在していました。サタンの裏切りと、それに続く地上への壊滅的な裁きによって、神の前で道徳的責任を負う唯一の被造物としての天使の特別な地位は終わりを迎えました。人間は、すべての天使たちに神の力とあわれみを示すために創造されたのです。ですから、私たち人間の創造は、天使の不従順に対する神の応答でした。私たちの天上的な被造物との関係の意味を簡単に見ておくことは、私たちがこの地上で直面する闘いをより広い視野から理解する助けになります。なぜなら、限られた地上の視点しか持たない私たち人間は、人生の試練や混乱、挑戦に直面すると、霊的な近視に陥りがちだからです。しかし実際には、私たち人間の存在と霊的成長は、天使の世界にとっても非常に大きな関心事なのです。

天使たちは、主がアダムに最初の息を吹き込まれる以前から、変わらない姿のまま存在しているようです。ですから、私たちはこの肉の体にあるあいだ、天使の被造物に対して十分に敬意をもって接することが賢明です(第二ペテロ 2 章 10-11 節)。しかしながら、人間は最初は「天使よりもしばらくのあいだ低いもの」(詩篇 8 篇 5 節)として出発しますが、復活ののちには天使をさばく者となります(第一コリント 6 章 3 節)。主がサタンに対して「おまえはわたしの僕ヨブに心を留めたか」と尋ねたことから(ヨブ記 1

[章 8 節](#)参照)、私たちの存在は、悪魔に率いられた天使の反逆に対する継続的な模範と応答として意図されていることがうかがえます。神は、人類を少なくとも一部において、ご自身のほかの被造物に対してあることを示すために用いておられます。それは、弱さの中から現れる信仰(私たちの側)と、罪にもかかわらず示されるあわれみ(イエス・キリストを通しての神の側)を含むものです。

ですから、私たちは忘れてはなりません。私たちは神に見られているだけでなく、天使たちにも見られているのです。一人の罪人が悔い改めるとき、「神の御使いたちの間に喜びがある」([ルカ 15 章 10 節](#))とあるように、それは多くの義人が忠実さを保ち続けること以上の喜びとなります。女性たちは「御使いたち(が見ている)ために」品位ある態度を取るよう勧められており([第一コリント 11 章 10 節](#); この原則は男性にも当てはまります)、また御使いたちは人類史における神の計画の成就について知りたいと強く望んでいます([第一ペテロ 1 章 12 節](#))。さらにパウロは、コリント人への手紙の中で、自分が「人と御使いたちの見せ物とされた」と訴えています([第一コリント 4 章 9 節](#))。

天使たちは決して無関心な傍観者ではありません。悪魔とその手下たちが常に私たちの信仰を打ち砕き、彼ら自身と同じように不信と不従順に引きずり込もうとしているのと同じように([第一ペテロ 5 章 8 節](#))、選ばれた御使いたちは私たちの仲間であり、神は主として私たちを助けるために「御使いたちを風とし、仕える者たちを燃える炎とされたのです」([ヘブル 1 章 7 節](#), [1 章 14 節](#)参照; [ダニエル 10 章 12-13 節](#))。キリストは幼子たちについて「彼らの天使はいつも天におられるわが父の御顔を仰いでいる」と語られました([マタイ 18 章 10 節](#))。また黙示録では、七つの教会それぞれに御使いが守りに立っていると記されています([黙示録 1 章 20 節](#))。このように「多くの証人に取り囲まれている」([ヘブル 12 章 1 節](#))のであれば、どうして信仰において気を緩めることができるでしょうか。天の観覧席は天使たちで満員であり、彼らは私たちを応援し、成功に歓喜し、失敗に悲しんでいるのです。このことを思うとき、私たちは勇気を得るべきです。預言者エリシャのしもべは、アラムの軍勢を見て心を失いかけてましたが、エリシャの祈りによって神が彼の目を開かれたとき、彼は「山がエリシャを囲む火の馬と戦車で満ちている」のをはっきりと見ました([列王記下 6 章 17 節](#))。同じように、私たちが心の目を開き、自分が決して孤独ではないことを悟らなければなりません。神は共におられ、御使いたちは私たちを見守っています。どの試練も、どの苦難も、どの戦いも、天の観客たちが見つめているのです。ですから、「忍耐をもって、私たちに定められている競走を走ろうではありませんか」([ヘブル 12 章 1 節](#))、天にいる御使いの兄弟姉妹たちが向こうから声援を送ってくれているのですから。

結び: 私たちの希望は永遠の希望: このようにして、私たちは信仰を持って忍耐し、「キリストの苦しみにあずかる者」([第一ペテロ 4 章 13 節](#))として与えられた試練を、光

栄なものとして受け止めながら耐え忍びます。そして、「この世というつぼの中で信仰が本物であると証明される」([第一ペテロ 1 章 7 節前半](#))その時を待ち望みます。その信仰がついには、「イエス・キリストの栄光の再臨において、あなたがたに対して賛美と栄光と誉れをもたらす」([第一ペテロ 1 章 7 節後半](#))ことを期待しているのです。私たちの信仰は強く保たれています。それは、最終的な救いと勝利、そして神による正当な評価と報いという希望——つまり、確信に満ちた期待——の中に生きているからです。この短い地上の生涯でどのような試練を受けようとも、その先に待つ栄光ははかり知れません。イスラエルの民が厳しい試練と誘惑を経てエジプトから救い出され、「乳と蜜の流れる地」へと導かれたように、私たちも同じように神の導きを信じて歩んでいます。今、信仰の目でしっかりと見つめましょう——神の救いと報いは確かであることを。そのことを心から理解するとき、私たちはまだ「奇跡の紅海」が分かれる前から、すでに神の救いを喜ぶことができます。たとえ波がまだ動き出していなくても、神が必ずご自身の時に、私たちを「乾いた地を渡る者」として導いてくださることを、揺るぎない信頼をもって知るのです。このような信仰の姿勢を保つとき、私たちは[第一ペテロ 1 章 7 節](#)にある「賛美・栄光・誉れ」を受ける者となります。すなわち、神からの賛美(主ご自身からの「よくやった、忠実なしもべよ」という言葉)、神からの栄光(私たちの信仰の勝利がすべての者に明らかにされるとき)、神からの誉れ(永遠に続く、目に見える報いが与えられるとき)です。これらの祝福は、この世の悲しみや失望とは比較にならないほど大いなるものです。永遠は、すでに私たちの前に広がっています。ですから、「忍耐をもって走り続けましょう」——神が共に走っておられること、そしてゴールで待っておられるのも神ご自身であることを、確信しながら。主は、私たちの信仰を築き上げ、忍耐のうちに成長させてくださる方なのです。

[ペテロ#23「信仰の目で見ると」に続く]